イ チ ニ ノ

『正午』

作：前島宏一郎

『正午』
登場人物表

Ａ　Ａ子　　（女）
Ｂ　Ｕ子　　（女）

（A・B、喫茶店らしきところでお茶を飲んでいる。
その距離はテーブルを挟み大きく離れている。）

A　久しぶりだね。
B　そうだね。
A　あれ以来かな。
B　そうだね、あれ以来、かもね。
A　いや、あれより前かな
B　うん、そうかもしれない。
A　ここも、変わらなかったんだね。
B　そうだよね。
A　閉めたんじゃなかったのかな。
B　そうなのかな。
A・B　…（同時にティーカップに口をつけ、同時に離す）
A　U子さん。
B　…なあに？
A　…まさか、こんな形で、また会えるなんてね。
B　…確かにね。思わなかったね。
A　まさかね。まさかとは思うけどね。
B　…なあに？
A　…相変わらずなの？
B　…ふっ。そうかもね。
A　…懐かしいね。
B　…何年前かな。
A　…何年でも、いいよ。
B　A子さん。
A　なあに？
B　なんか、こそばゆいね。
A　ほんと。
B　なんて、呼んでたっけ？
A　おぼえてないよ。
B　えー。
A　おぼえてるけど。
B　なにそれー。
A・B　…（同時にティーカップに口をつけ、同時に離す）
B　…ねえ…

（B、おもむろに視線を窓の外へ移す。海を眺めるよう。）

A　…（Bにつられるように視線を窓の外に移す）んー…
B　…もうすぐだね。
A　…そうだね。

（A・B、同時にティーカップに口をつけ、同時に離す。のちに腕時計を眺める。）

A　あ。

A・B　ピッ、ピッ、ピッ、ポーン。

（A・B、そっと立ち上がり、時計の針が１２時を指すように両手を天高く伸ばす。）

A・B　お昼だよ。

（A・B、呟くように波の音を口ずさむ。のちに、それぞれに海の遠くを眺めるているよう。）

（A、深呼吸をするように語り出す。B、引き続き波の音）

A　手紙が届いた。
未来の自分への手紙。
それは
正午を迎えた私へ。

（A・B、太陽を眺めるように少し視線を上げる。独り言のようにそれぞれに語るが、合間には波の音。）

A　私は今何をしてますか。

B　まず
元気ですか。
これまで何をしてきましたか。
これから何をしますか。
こんな手紙の
記憶はぜんぜんないけれど
それは
私だった。

でもさ、あと半分って言われるとさ
逆に言えば明日は絶対あるってことじゃない？
なんか微妙。
盛り上がらないって言うのも変だけど
なんだろうね。

言葉が重なりきらない程度に同時に
合間には波の音

（A・B、おもむろに向き合い、手を天高く伸ばす。）

A・B　こうさ
１２時をさせばさ
ここから
日が傾いていくように
針が
少しずつ

傾いていく
その少しずつが
実感になっていくのかな

ゆっくりと
耳をそばだてる
その
針の音に

（A・B、海辺に歩みを進めていく。昼下がりの海辺。
波は荒い。
伸ばした手の影を見つめ、微笑する。二人の距離は離れている。）

A　海久しぶりかも。
B　そうかもね。

（間）

B　でもあれ以来さそうあれ以来、明日は当たり前じゃなくなってるんだよね。もうこの血にはあれ以来もう何かが染み込んでいるような気がするんだよね。
A　さすがおっきな厨二。

B　まあね。
A　ここはさ、もともと潮と潮の境目なんだってよ。
B　そっか。だから、こんなに荒いんだ。
A　でもね、護岸工事も、進んだんだよね。
B　そうなんだ。そうだよね。
A　だから、見えなくなっちゃって。
B　あのときは、もう夜だったからね。
A　そうだっけ。
B　いつだっけね。
A　いつでも、いいよ。

B　離れて過ごして
それが当たり前になって
時は流れて
でもそばにいた記憶は確かにあって
まだ
そばに寄れるのに
まだ
触れ合えるのに
とか
よしなしごとを
思う
まるで

うたかたの

A　卒業アルバムの
集合写真のさ
顔が
ぽつぽつと
黒くなっていくわけ
あれ以来さ
そんなこと思うわけ
となりの
誰々くんが
黒くなって
反対隣の
誰々さんも
黒くなって
私と
誰々君と
誰々さんの
違いって
何なのかなって

B　そのアルバムすら、もう手元にはないけれど。

（夜になる。波の音が際立って聞こえる。）

A　それは、おぼえてないけど、おぼえている、夜のこと。
B　おぼえてるよ。里帰りするとかで、私、送るよって、車出した。
A　明日が、どうなのかとか、考えもしなかった。
B　その道すがらに、ここに寄った。
A　ざざー。
B　まっくらで、波の音は大きくて、怖かった。
A　ざざー。
B　でも、幸せでしか、なかった。
A　そうだね。
B　…えっ？

（A、おもむろに、手を天高く伸ばす。）

B　…？
A　見える？
B　見えない。
A　もっとよりなよ。
B　…
A　…いいから。

（B、Aに恐る恐る近寄る。Aの姿を見て、自らも真似る。しばらくの間。徐々に伸ばした手が傾いていく。）

A　3時だよー
B　おやつだよー
A　ひがくれるまでー
B　あそんでー
A　いきがあがってー
B　どろだらけでー

A　6時だよー
B　そろそろー
A　ばんごはんだねー
B　じんせいのー
A　ごほうびはー
B　おいしいごはんかなー
A　それともー
B　そのあとのー
A　でざーとかなー

B　わたしは、黒くならずに、
この闇の中にいる。
誰のかわりに？

A　誰のために？
B　辛いとか
A　悲しいとか
B　そんなことばかりを
A　うけおっている。
B　そうだね。
A　…えっ。
B　朝まで。
A　…
B　朝まで、いれば。

B　波の音が、なぜか、静かになった、気がした。

A　ざざー
B　ざざー

B　引く波と
押す波？
今が良くても
明日は辛くて
明後日は良くても
明々後日は辛くて
でも

A

いい日があると
思えば
明日は
引く波から
押す波と
変わると
思えるなら

別れたら
また会えると
そう思えるなら
波と波が
ぶつかって
白い飛沫が
上がって
その飛沫のように
泡のように
消えて
それを
辛いとも
悲しいとも
思うことも
なくなって

A　そんな自分に
なってしまう
ことが
…

A　U子さん
B　…ん？
A　あのとき、どうして仲良くなったと思う？
B　…なんでだろ。
A　名前が、古臭いって話。
B　A子さん。
A　U子さん。
B　そうだっけ。
A　「同意」って言ってた。
B　まじか。
A　あと半分ってことはだよ。
B　６０前で死ぬのか。早っ。
A　それってさ、あれみたいなこと、ある前提？
B　…どうなのかな？
A　…そもそも、手紙、何書いてたの？
B　教えない。
A　教える。私が。
B　えっ。

A　…（手紙を探す）あれ。
B　どっかいった？
A　あれ。
B　…（自分のポケット等をまさぐる）…あれ。
A　ま、いいか。
B　…うん。

（間）

A　世界はさ、何回も、変わるやん。
B　…うん。
A　よく考えれば、６０だって、奇跡みたいやん。
B　…そうやねー。
A　私がー、黒いほうに、なっててもー、全然。
B　…そうね。
A　泣く方じゃなくてさ。
B　…そうね。
A　わたしが
B　滅ぼされていれば
A　よかったのに。
B　…いや、いやいや。
A　みんな、十分、泣いたやんか。
B　…うん、私もダンナと離れたときにさ。

A　辛くて？
B　いや。辛くてっていうか、うん…そうね。

（間）

A　私は逢いたいと思ってたよ。
ずっと。
ずーっと。
あのあと、離れてから。
ずーっと。

B　…

（間）

B　言いたいこと、全部、言われちゃった。

A・B　そう
残り半分の人生を
考えた
何のために
誰のために
どう生きようか

…いいんだ
何のために、も
誰のために、も
手が届かなくても
遠くに離れていても

傾いていく
針の音を
聞けば

（A・B、近寄り、肩を寄せ合う）

A　かっち…
B　ざざー…
A　かっち…
B　ざざー…

（夜が明ける。）

（B、ひとり喫茶店らしきところに佇む。ティーカップを口に運ぶ風の仕草。しかし、そこにはカップはない。カップをつまんだ指を離す仕草。）

B　…

（B、おもむろに立ち上がり、海を眺めるように遠くを眺める。
のちに、何事もなかったかのように足早に去っていく。）

END